
左側の桜

彼岸迄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左側の桜

【Nコード】

N3137T

【作者名】

彼岸迄

【あらすじ】

桜の木と人を重ねた短編。

そこには二本の桜が寄り添うように立っていた。遠目から見ると一本の大きな桜の木があるように見える。

辺りには私の他には誰もいない。春の陽気と桜の木があるだけ。

あの日にあったものはここにはもうない。ただ、この桜と私の胸の内に残された約束以外は。

それは随分と昔のことであつたような気がする一方で、ほんの少し前のことであつたかもしれない。

長く生きていると記憶の持つ時間感覚が薄れてしまうのだろうか。いや、あの約束は……

そうだ。私は何度もそのことを思い出していたのだ。来る日も来る日も同じ記憶を引っ張りだしていたはずだ。だから、常にその日のことが昨日のように思えて時間感覚が狂ってしまったのかもしれない。

かつて情熱と共に過ごした日々には、あれはいつも昨日の出来事のように頭の中にあつたのだ。

しかし——それもいつしか忘れるようになってしまった。強い思いが薄れて消えてしまうほど沢山の出来事があり、長い時間が過ぎ去ってしまったのだ。

そして、不意に出来た休暇に在りし日のことを思いだして郷愁に駆られてここまで来たというわけだ。

「おじさんも桜を見に来たの？」

突然後方から声がしたので少々狼狽しながら振り返るとそこには中学か高校くらい年の頃と見える少女が立っていた。

「ああ、そんなところだね」

私は彼女の顔色に少し不審がよぎったのを認めた。そういえば先ほどの声も微かに震えていたような気がする。

しかし、何か後ろめたい気持ちがあるわけでもないし余計な誤解

を招くのも避けたいので、再び視線を桜の方に向けた。

少女の方は少女の方で一応納得したのかそれ以上の深入りはせず、桜の周りをゆつくりと徘徊しながら花を眺めていた。

私はそれを横目に見ながらいつの間にか昔日のことと重ね合わそうと試みていた。

もつとも、ここにいる少女はかつて私が約束を交わした人とは正反対の容姿だった。かつての思い人はショートカットで快活であり、健康的に日に焼けた肌を持っていた。この少女は髪が肩に掛かるほどの長さで病弱な人間を思わせる透き通る白さの肌でどこことなく弱々しげな風だ。

私の試みは無意識のうちに湧き出てきたものだったが、次第に明確な挫折を余儀なくされた。

二人はあまりに違い過ぎる。

「あ、あの……」

再び少女が話しかけてきた。さつきは桜の木のそばまで行っていたのを見たが、いつの間にか私の横に来ていたらしい。

「いつも、ここに来ているんですか？」

「いや、今日は10数年――20年近く振りになるかなあ」

私の心は先ほどの試みの失敗を忘れてまた他の過去を思い浮かべ、懐古の情を呼び起こさせた。

「そうなんですか――それじゃ、私が生まれるより前のあの桜を知っているんですね」

「そういうことになるかな」

はつきりと年齢を聞くことに何か後ろめたさを感じたので私はただ同意し相槌を打った。

「左側の桜って私が生まれた時から病気で、最近じゃ花も付けなくなつて心配していたんですけど、今年は沢山花が咲いて……」

彼女はにわかに嬉しそうに話した。そして、上手く二の句が次げなくなり言葉が途中で途切れたと見える。

「そうなのかい。私が最後に来たときは病気ではなかったけどなあ

……」

左側の桜をよく見るとなるほど茂り方に勢いがなく、木肌や枝の光沢が失われているように見える。心なしか花の色も薄いかもしれない。枯れ枝が何本もあり、その命は長いことがないのではないかとすら思えた。

もしかしたらかつてここで再び会う約束をしたあの人の魂が私が再びここに来たことを祝福して最後の一花を咲かせてくれたのだろうか。

かつて私と約束を交わした彼女は――次の年の桜を目にすることなくこの世を去った。

そして私もこの桜を二度と見ることなくこの町を去ったのだった。

この少女の証言から予測すると彼女が亡くなってから、この桜は身体を病んで徐々に生命力を失っていったのだろう。

彼女の思い出の残滓が段々減っていくかのように……

そして最後の余力を使って――

その時、不意に冷たい風が私の喉へと突き刺さり、思わず咳込んだ。

「おじさん大丈夫？」

少女が心配そうに私の顔を覗き込んだ。

私は笑顔を繕って頷こうとしたが存外に長らく咳込んでその場にうずくまってしまった。その咳はまるで病人のもののように重苦しく続いた。

医者は大丈夫と言ったが……

そんなことを思っているうちに咳はようやく収まった。私はこの旅行に來た原因を思い出した。思い出したくはなかったのだが、こゝうも体の方に病気の影が差すと嫌でも頭に浮かんでしまう。

そもそも、私が忙しい生活から解放されたのは急に倒れたからだ。病院で一通り検査をしておそらくは過労ということだった。そして私は持て余した時間を見繕ってここにきたのだった。

「大丈夫だよ」

私は心配そうに見ていた少女の方を向いて笑って見せた。彼女は一応頷いたがそれでも不安げな表情をしていた。

私はそれを尻目に雑草の上に腰掛けてまた二本の桜の方を見た。そして先ほどの咳は随分と病人のようだったなと思った。となる

と心のどこから不安が湧いてくる。

あの朽ちかけている桜は私ではないだろうか。

あの人は約束を信じたままに死んだ。ところが自分はどうだ。多忙にかまけて毎年この場所に来るといふ大事な約束を無視し続けて生きてきたではないか。

それどころか、近頃では約束したことすら忘れて生きていたではないか。

そして、偶然ここを訪れただけで——そのことがあの桜を狂い咲かせた。

だが、もう私の肉体もあの木のように長くはないのかもしれない

……

「——ね、あのね」

「ああ、なんだい」

「私ね、小さいときから病気でね、この前手術してやっとよくなったの。そしたらね、あの桜も咲いて……」

彼女は辿々しい口調で話した。私が先ほど不安に思っていたことが表情に出たのだろうか。

「きつと、私のことを祝ってくれたのかなって思うの。だから、おじさんも今日ここに来て二本の桜が咲いているのを見て良かったと思うの」

なんと根拠のない慰めだろうと思ったが、私は懸命に言葉を伝えようとする彼女の姿に微笑ましくなった。

そうだ。根拠のないといえばさっきの私の妄想だって同じことだ。当たり前のことに行き着いて肩の荷がすつと下りた気がした。ふと時計を見ると出発する予定の時刻を少し過ぎていた。

「話してくれてありがとう」

私は彼女に——今度は本当の笑顔で——お礼を言った。

「う、うん」

彼女は安堵の表情で頷く。私はそれを見届けて「じゃあ、おじさんは行かなくっちゃ」と言い、もと来た道を引き返し始めた。

4、5歩歩いた時、急に不安げな声で少女が「あの桜、来年は大丈夫かな……」と呟いたのが聞こえた。

確かに偶然今年は花が咲き誇ったとはいえ、病は進行しているのかもしれない。そもそも、今までほとんど花を咲かせなかったのだから来年も今年のように咲き誇る保証はない。

「分からないな。だけど、私はまたここに来るよ」

そう言って一瞬振り向いた時、私は少女の微笑んだ顔を見た気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137t/>

左側の桜

2011年5月16日04時10分発行